

S F ファンタジー

神曲

森田博

目次

「プロローグ」

「第一部」

「ハードボイルド 白神の夜」

「第二部」

「天草島原の乱」

「エピローグ」

「亜衣姫と羅夢王」

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

epilogue

「あとがき」

「プロローグ」

仁安元年（西暦1166年）、M61星雲の中にある星から、一船の長さ二キロにもなる宇宙母船団が、漆黒の宇宙を一路地球に向かって航行していた。「セム中尉、あれが地球です」と副艦長のアレン少尉が言った。

また時を同じくして、鷲座の惑星状星雲NGC6781の惑星から一艘船団より離れて、日本の仙界を目指して大宇宙を航海していた。

「ほう、あれが地球か……」がらんとした宇宙船の中でひとり呟いた。

そして、日本の仙界と高天原に降りた。またM61の一部の船団は、他の星を求めて航行を続けた。M61から来た星の母船にはセム中尉と玉姫、アレン少尉とミール准尉たち多くの人達が、MGC6781の星から来た宇宙船には、セシルひとりに乗っていた。

「第一部」

1

ここは、ガダルカナル戦線、死霊たちの部隊である。

中隊長は、自分の亡骸を見ている。

「
」

骨と皮と蛆虫である。

哀れ補給路が絶たれ、累々と無数の餓死者が横たわっている。その餓死者もまた自分の亡骸を呆然と見つめていた。旧式の三八式歩兵銃と、これまた総重量五十五キロにもなる、九二式機関銃を分解搬送しながら、未だ敵兵に遭遇せずして部隊は全滅した。

中隊長は「このままではどうにも死に切れん」と言った。いやもう、とうの昔に死んでいるのだ

が部隊を召集した。ひよろひよろと、死霊たちが集まってきた。中隊長は「さぞや悔しかっただろうなあ」と思った。皆、衣服はぼろぼろで、死んだお蔭で激しい下痢やマラリアも治まっていた。

「何か好い知恵はないものか……」

真夏の熱帯樹林の中で、大田晴海大尉は嘆き、部下の死霊達に言った。その、青膨れした死霊の中の河部曹長が、「先発の川口支隊には、まだ生き残っておる者がいるという噂なのですが」と生存者のいることを告げた。

「えっ、そんなことは聞いたことがないぞ、お前はどうかだ」

「知らんなあ」「仮におったとしても、戦闘能力は無いと思うがなあ」と伊藤上等兵、鬼塚二等兵ら、死霊達が口々に言い合った。

「そうか、でも生きていれば何とか彼らを援護しよう」と大尉は言った。自分のしゃれこうべから、ペンペン草が生えているのを見て、「はあっ、死んでいるのにどうして援護が出来ます」と皆が聞いた。「そこは分からん。分からんが、ここにいるも埒があくまい」と言い、「ひよっとして、何か出来ることもあるかも知れん」との大尉の結論になった。

早速、もと来た道を引き返すのだが、今度は歩く必要が無い分、随分楽であった。亡骸は延々と続き、見たところ何処にも銃創の痕が見られなかった。餓死者は至る所から現れ、死霊軍団は益々増え、千名を数える大部隊になっていた。一木清直陸軍大佐は、まだ生気があるうち軍旗を焼き、割腹したのち、頭に拳銃を宛て自決し、もうこの世にはいなく、早々と靖国に飛び立った。

「わ、死んでる…… 死んでるぞっ、」

「何たる大佐殿か、我らを先において帰還するとは。共に生ける屍ではなかったのか」と言い、「情けないぞうー」と叫んだ。

そしてその声は空しく、ジャングルの奥深くまで吸い込まれていった。

大本営は、昭和十七年（西暦1942年）十二月二十五日に、ガダルカナル島からの撤退を決めたが、その連絡が途絶え逃げ遅れた中隊であった。上官らはラバウルへと、戦況の報告に行き、二度と帰って来なかった。そしてその頃、日本国民に対し初にして、次の転進命令がラジオで伝えられていた。

「大本営発令、ソロモン群島ノガダルカナル島ニ作戦中ノ軍隊ハ、昨年八月以降、激戦敢闘克ク敵戦力ヲ撃破シツツアリシガ、ソノ目的ヲ達成セルニヨリ、二月上旬同島ヲ撤シ、他ニ転進セシメラレタリ」

つまりこれらの兵は、内地に帰されることもなく、南方激戦地に留め置かれ、見捨てられたのである。日本軍の諜報機関である、ユダヤ人、ベラスコの「東（トウ）」情報は完全に無視されていた。

更に驚くべきことには、「作戦の神様」と言われた、辻政信参謀本部作戦参謀は、実情を無視した攻撃を強行し、迅速な対応を執ることもなく、ガダルカナル島の地獄の戦場から、ひとり駆逐艦で撤退していった……。

そしてついに、生きた兵隊に出会えた。

2

そこは生きた者同士のもの、寄り合いの川口支隊であった。五拾数名の部隊に縮小していた。ラバウル

に行き、未だに帰っては来ない川口清健少将の代わりに、ここを指揮するのは、阿南（あなみ）英隆中佐である。海軍工兵隊生き残りの阿南中佐は「おやつ」、この敬礼している大田大尉が、もはや人ではないことを察知していた。なぜなら時折透けて見えたりもするのだ。「ありやあ、透けとるばい」と阿南は内心驚いていた。

「中佐殿、この戦いはどうみても無理があります。止めましょう。止めて、終戦まで畑を作って自活しませんか」

「自っ、」

「は、畑をてつか、こぎゃん島にか」

「ラバウルでは、地下壕に畑を作って、自給自足していると聞いておりますが。軍旗も焼いたし、一木支隊も滅んだし。敵兵は、我らが衰弱して死んで行くのを、ただ見ておるだけです」と大田晴海陸軍大尉は言った。

「我等は、米軍がタワウラ島に移動していたのを見ておりました。彼らは、初めから、我らを眼中には

入れてはおりません。今我らが死霊部隊は、ざっと千名には下りませんが、ただ何分死人ですので、齒向かうすべを知りません。ここに来る途中、金縛りの術を教えたところですが……」中佐殿、次の一撃でもう戦争は止めませんか、無理です」と大尉が青い唇を噛み締めて言った。

「うーん、そんな死霊部隊というもんは、私には見える者なのか」と中佐が聞き、「目を凝らして見てください。部隊は目の前に、隊列を組んでおります」と大尉が大日如来の印を組んだ。すると、そこには千人ほどの隊列を組んだ、死霊部隊が浮かんできた。

「情けん無か……金縛りつてか、そこまで堕ちよるとか」

「そんなでもな、金縛りに会わせた敵兵を殺すことは出来まい。士道に反ばしとらんのか」と阿南中佐が言い、「し、士道ですと」と大尉が驚きつつ応じて、「我らが敵兵を身動きが出来ないようにしておきますので、中佐殿らが手足を縛ってください。大丈夫です。たとえ百人掛りでも、我が亡霊共が首ねっこを押さえつけ、金縛りに合わせますから、決してじたばた暴れるようなことはさせません」と言った。

そしてこれから敵の飛行所を調べに行くのだと言う。大尉は、「食料、武器、弾薬の在りかを図面

に書いてお知らせします」と言い残し、皆に号令をかけ、死霊部隊が隊列を組みながら、徐々に透明になって行ってしまった。

阿南中佐は、「あん念動力は何処から来よるとか」と不思議に思いつつ、「まだ補給船は来んのか」と通信士官に言い、何時までたつても電信は来なかった。真夏の太陽がこの島を照り返していた。灼熱と、飢餓と、屍の山の幽玄な島であった